拙数篇辞退者よりも無業者行
以年あのきの松の本をもて
藤谷宮内少輔仲次一令奥書
表書をもつて紙元の表の図の松
菊社畳表のすあるを七月中旬より
おろし十二月をもめ鎌倉までのぼるべき
よしきこゆる侍るものなり

右東路のほ光以藤野章甫本校合了

紀巴富士見道記

今年永禄の春も十五日の夜の夢に
富士見るべき事を願ひ思ひ立ちて記分る
べし　此度は人の都なれば絶えぬる
不を行末もて頼めの所もなく奈良の京
離れて一首もあるべき思ひ渡り橋を西に
鳴いはもの先めと宮もの先を所なること
あり国茶比江村竟次興
春草はいつ清きを師走の雪
席は連る曽谷康敬張行を感きもの

しを秋まくなりとも春をなのめやしをなる関
はるかなる事にあるて賢くも聖議院議員
かうもとく

大ひえは春くはなる富士は雪

岩根松ありて二百領可被拝愚句てゝ作ゝ
春来てや古人をまつ　山櫻

御入寄に被拝ゝて廿六日歌書完
ゝまして

朝ゝ風は色ゝやきう郎

廿九日御殿下餐句可申は氣色のまゝ辞

ゝゝゝ

春は日の下草ゝゝ色もる

夜ふ入ゝ被古忘数流ゝ殿下新御王様我さ
ても殿ゝゝと仏祠古句ひも不浅ゝ源氏物語は
宇治のまきゝ加ゝひゝゝゝもしも思ふ
ゝ月ふゝ作き殿ゝゝ端午句ゝ所ゝと云ふる
明日ゝは小御内云上蓮目はゝ免万句執行

梅ゝ香や　ゝゝ　巖　嵐

旦日はゝ会議いゝゝ口述ゝ事侍板書ゝゝ
色も香ゝ老ゝ　却面　花の枝

花ゑりかる席に時も拾つき會そとかつ六百〇餘外
とて真りし蓋可進の色色うちとりて不有能
霞ゆきさつ〇忘月れ天涯の姉
七日ゆけ敬三条西殿稱名院殿御影前昌休の
卯古道ゑて後〇入さい思ひ〇れ名殘惜中ふ
も馬場康清とて若人有三年れかるさう風雅
執ん〇そ惜邪をも感〇るきうれとい名ふ
秋れ比の會ふ
松〇蘿袋ハ秋のいろそ
ゑれ人〇俗老ちうひ紙も憂来後の文れ

草かつ十月ゆを朔曇も垂覽東を尚〇後
もう〇ゆる後のおう〇浦も空をうしうて黄
老ゆ比を〇櫻の御馬場ふく面ちうハ
弱冠ハ関山ちう〇有〇ハうへハをう〇かし
先〇〇て〇徳園ちう〇笠もう〇ハ行ひぬ
今日志も申れ見富士渾ふと世見 但舊事紀不詳傳聞之
ちと〇て神前ゆて觀世宗節同大夫もをう
かもハ出ち〇れ面行来を祝して行る坊そ
ま〇醉れ行ちうハ月の桂れ〇ふ
かと〇て〇敬舊論ちう桂の枝橋〇て宗祇在京

のちに人伝に聞きしかば酒肴をかの大津
馬早めて迎数多来りしかば何とかしかるべ
き人々に栗田口をさへ行きて歌を松坂と言
後ろ世の事ハ義仲も覚えず栗毛なる馬に乗り
命相叶ひて云名所国々廻りて日吉院に
僧正の室に入り十一日に夜暁御相尚者も
滝に音に祈願せし初の言葉法坊にて情深
き人なりしを尋ねし花光坊園蔵坊なり誘ひ用の
清水に参りて行道すること会も数多有へきに
物語もうひかし貴き給ひ数

関山やたちまちに戸ぼそのうの郎
進義郷州より船にて来るより告もかか
ぬ所の濱傍ひて行せ郊外栗津の昌院をは
うと言ふ心駒も嘶きを野路に暮れ
ぬる石山世尊院一首哀れ者へ
東を向ひて会に会ものも兼ていとまなき
方に船出して物語して次と言ひ
年に昔金蓮宗養寺回峰千日を小獨
歩もるに到ないとなりきを思ひ出と秋の
名を九月の頃八の末も暗冷に船出して

秋は月ゆえ一しほ影澄るなるべし
又秋ゆはていひて三井寺流れもしれてるる
光浄院とて園城寺外れ逆使ともゝ〳〵るはなる
らんをもとひて寄道をもんゆるるて酒ゆ
せるひとり御田山園孫太郎よりて目をたてる
如若人なるゝ小鷹すゝ馬ゝやめなりて柳う
清ゆゝゝ又ゝゝゝ世尊院道九をきゆゝゝ
寄をは帰足入ゝ濃行ゝゝ光浄院の餐白詠望
枝ゝゝゝうゝやかゝも川　柳
舟をは清ゆゝもへ方は坂ゆれ北浦ゝ濃

の横ゝ差ゝゝぬ二日斗ゝて水ゝ北は園志
屋敷は霜の降ゝもゆゝ祝ゝたゆゝゝゝて
津田の細江登蓮法師は高志柳ゝ吉寄に
人柳ゝゝ小威德院ゝ志ゝ向ひゝ嶋州の舟
ふも重ゝゝゝ乗ゝ津ゝ日をゝゝゝ佛
涅槃は日ゝ光岳和尚七回ゝ千句ゝゝゝゝゝ
一巻句ゝゝゝは
花を今日ゝゝゝゝゝゝゝゝ
孝子平井加州同威德院布施新家人平井
駿州ゝゝゝゝゝゝ嫡孫滿

庭に已後知席にまゐる若元河集名人義光卿の後
裔なり様々関另の弄奏ありしかは関人宗和
往生の庭うと思へり十九日のあさ宗和一人伴ひ昌
叱に参る昌はとひとえうのうん玉の法山の祐
師を引きゆきて威徳院能をし若元を特業す
ゆ梁瓦に花を拝し一日奏に花を見る
布施山に咲の紫ゆ賢友いろいろ花いろ
ゆえ世一日打育王石塔寺勝願坊ゆ興行す
別所の小時ゆ庭に花の芽ゆ
十年に花ゆ咲ゆ山ゆ抱一見せ帰るに銀

道坊に花のうつりにく
ぬるゆ雲や一本に花むく時雨
ゆ見るに思ひ銀道坊の墓所ゆ詣
日野ゆ蒲生兵部大夫賀茂宗祇伝授
古今に名ゆ幸に語り興行あるべき
ゆ得ハ
ゆうのひぬ種に花軍一花書
嫡男鶴ゆ代受深ゆ山長庭ゆ歌
ゆ梅三胡宗祇仁聖寺ゆ
所ゆ

春米多の物語深山うる
はしの本の女一見する所なり
春米多の物語山里に幕を張る人の僧
と聞まほしく帰りて買秀の系まく送り
給へり布施貿皮河井利康より別甲賀
領宮とる比ろ無宮の黄を思ひ合る三鶯
の峠より三町斗にて珍鹿の御茶屋さひる
を帰りてまくしる假屋の程に書付きる
姫ゆくまくと急きり世珍鹿山花ふくるに西
一里とりるとて弁七天川を隔て有後城の

九本橋の青小故ゆ本思ひ合をくる国稔記
国は地蔵にて行春養薩の作堂に後に橋本
とて吉本を是や珍鹿の国る安乳の
平故ゆ名とて女人日蟹山正法寺開民部
大輔伯弟国山女中領の地に清庵和尚弟大徳寺
大顕和尚御国居御帰滞高に女人日弟
桃色春花をる下にて後の山登る御牛
町に余り山屋に入て何を海黒影向の作後
なひく和尚
年に菓子る鶯の山やはに鶯の金波新

と書付て、法殿より霊雲見物仕候
もらるゝ不ゝ、やゝ養ゝ、後浦の席ゝ寺外の
元一杯とゝ、きよ和尚所望
花の枝を、ハ書ゝ、色ゝ
有物軒として、故ゝ後風ゝ中ゝ石紀市ゝ寺
れ日伊賀ゝ行ゝ、るに雷ゝ書ゝ後浦を
ゝ帰ゝ、彼山荘ゝ、九日の宮
ゝ鹿山麓ゝ行ゝ和尚ゝ、
さ歓ゝの所ゝ、同宿東ゝ云
所ゝ、ゝ稲生厳人成武雄

十晦日一杯ゝ
奥津船庭ゝ、ゝ、海ゝ
翔ゝ、来ゝ白ゝ、音寺ゝ断揺ゝ、
賢蒲白ゝ、ゝ奥
後ゝ、春ハ外ゝ、
満座ゝ後浦潜ゝ、藻揺ゝ、
引舟ゝ、ゝ、ゝ帰ゝ、桃花
ゝ神戸蔵人成武
来ゝ、ゝ、園、桃
ゝ神宮ゝ、ゝ、西川

舟行　河出郡

山川の名をも和泉田辺にて結ぶらむ

六月雨ふりて明日朝渡りの八十瀬の末にて

高田孫左衛門尉さしかへして別れをつけ袖濡らし

大福田寺にて早く見出て当名所を見て聖晩ごとにも

をさめて月の道喜が宿へ入りけるに舟にのせて

尾州へ渡りぬ蒸江より川沿ひ郷やまさる

かしこよりせめて中府といふ所にて津瀬より小

牧へ付けるに明院主にて一夜舞楽物などに固く〔 〕

をとりとらせるに先にも飛脚ありて義之〔 〕

輝麻呂迎へし院主にて一日議（識り）相に此故郷の同じ宿

に安じて旅の宿ともさらに風情たる

深き人々の志にひかれ春の日秋に相互ひ

よも尽きじ　張行なるは発句にてさることなん

ありし於此寺

咲ちるも志しあらん花はまことの郷

於善光寺如来別当有体

庭の海春の霜ふる露の朝水

於蜂屋兵庫助頼隆

待ちしむらさめや半天春の月

於瀧川上屋敷進上之景
ちるとうたるを見ては 萩はなれ葉の郭
賀嶋順親奥州
姫ゆかりの木陰に 桜も花も却
松田直温卿
ちるとうてもうれ 後は花
於大野出羽義元
春雨はたちかれて 水仙はさきの郭
於祇松寺天神社僧 女之日
春深紅若葉の南の郭

大野俊秀法行
山人ちるを仰ぐ 梅の影ひとり
三月晦日 桜幷貴婦人
明さ春とあるひまんと 春は暮
卯月二日
仰か雅なる ちんの花ちるも
於矢玉坊白山社僧
卯月花の雪は 白穂は本洞哉
於誓願寺
一ちるや ちるの郭公

於大寺新作度御新望
志ゝ為猶富ゝしかりしかば花の道
於本市助言付立ゝ
ゝ作るしや葉之へ花之へ深夜年
富士一見為敬奉ゝて張行不乗賀良改
所望
なゝしゝゝゝらも行ん浦る時鳥
森鴻貞仍所望同前
春秋は花や草野の草ゝ家
世二百今春夫夫勧ゝ能芝居ゝ九坪松元院

ゝ題ゝ春送ゝ夏所向ゝ行ゝ
御送ゝ元ゝ中ゝ四寺宗直ゝ別ゝ
日ゝ第ゝ第四日ゝ相ゝ惠酒ゝ
ゝ辞ゝ市ゝ明日の一杯
蜀魂ゝ
世日ゝ
ゝ千里ゝ道ゝ屋ゝ回楽
ゝ山ゝ迎ゝ
ゝ三河の豊川ゝ祭ゝ社稲
ゝ世ゝ大室西光院ゝ要行

風は鋭くて虎か思ふに飛はしける
廿六日長樹晩あら
松山の松木やうくに蔵王端山の跡
廿七日八橋よりこへ尾州佛存ら以布よもさとすり
そのこと引清もたるへしあるうかは花をそれし
すみし求る洲杜若插入長と見しかあるきて来りて
杜若とて發句あるとか云ありまた
杜若あり居くろく木陰の跡
跡座より迎は馬をや免て年暁し無と終りかかり
於今日は發句あると真行まて又尾州し 三冊る

玉林新鄉個の故何ふとく山帰ともて縁ありて興行
ありしとく所望にし
晴島以まむしるをときて中 旅の宿
筆に任せ早卅九日品崎へてあかし出すに八橋の
杜若断絶遺恨をと額に有る代官衆岩吉十郎
聞傳へとて八橋面馬場とらへ在所ても使に橋添
今人の古老は名を呼下知して可植置としあり
ありて後国の旅人根ぬきして行故論も無用とて
實ありと云へるは橋柱とて割てとられし身へとも中
あり西より下馬堂を会後のは松一もとし沢の半に

時雨の雲と云一たび雷鳴ひらる木陰可尋ふ
お思ひ入るふ石塔の業平朝臣と在所の人
一社若くるかせ杜若の田を刈今ふして杜若寺とあり
年と暮たる田を刈今ふして杜若寺とあり
とまるふ一垂仁朝代の折紙書て石塔
引とそ法ふ極楽して石塔のもとあり
々の橋ふ露とそ帝小枝ふ寄掛るを流れ
敗ふ一餉を人家ふ有ふ昔物語ふ長坂
坂方ふ一車ふ矢ふ化の宿ふ志ふ橋ふ
川上の方方ふ平町を陳て志ふす。坂ふ也坂

つ〻く仙魔所道志ふ人ふ帝部誓願寺
一年れふ御在国新地の家ふ入端年前白
石川月四ふ無行
ふすふ一葛薄も小如袂ふ郎
六日又島井伯賀入道亭ふ
薮ふ行たふもふふ人ふ郎
孝精ふ席先達の作意名所ふ雨
一宋行ふ小川ふ人信水ふ志ふ帰ふ
再今所契ふ朝ふ二人ふ遊ふ
国国ふ国ふ云法寺井左衛門源川風呂に入

山海景二階にして縁硯筆紙寄せ来る湊の色
は味一しほなり八日は門外の清寿一折興行
水おもてもさも若苗の緑かな　邨
九日は仙庵にも二村山を跡に見て行路
に坂をいさゝかくだりて白菅浜名橋の行と
海もさえ澄て富士見ゆる日より駒し
まかせて道も覚えず口はれのほるまじくなりけり
間に着て暁より雨降ければ天龍の漲音騒
浦の入海の里をとをくより激浪深く手繋馬
此あたりむかしは唐し渡るも覚

てうの川の里はなくして夜も明方は清見寺の
先行て日坂に至りぬ高山は嶮をもち
ぬやら小夜は長山しよりぬ雪ぬ大原和尚開基
一字殿前立寄て揮毫一盃面は柏旬はりくるを
望て書句あり
音なくき山もみゆ越を摘田要見ぬ言尾毎に
葉り菊川と云名も自山あり残をこゝしかなやと
宿あかく大井川にて人をとりつひてうくのはる
に小夜は中山長山とりあるも清きあたり二三里は
ほと山はつゝしむ一文字が身して手深山は御わきしも也

賀之右衛門[illegible]男山を川
原より[illegible]も深く流れ[illegible]所ふ[illegible]
[illegible]ぬ宮[illegible]宗長知世[illegible]
宇津山[illegible]ぬ我いんとする道とする[illegible]右
谷[illegible]て今年に成て[illegible]ぬ
蔦楓行[illegible]木の[illegible]
[illegible]余波少地
[illegible]
[illegible]実の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]国[illegible]和して[illegible]
の名[illegible]独[illegible]
宗長山居の地[illegible]所おせ[illegible]一冊筆紙等
[illegible]良分[illegible]道[illegible]一町余り小川を渡り
別墅を訪て[illegible]寺[illegible]誓願寺[illegible]
[illegible]
[illegible]法隆寺[illegible]
谷[illegible]三町余り[illegible]入て庵室を見[illegible]
一体和尚墨跡[illegible]筆[illegible]古文字宗長像御
[illegible]

しら但無跡なれども八重えきれる衣服小墨染と
うへみしらく水巻れそうへ小簾ゐとはけかしと云
つとてさなかも也賢しは道遥院殿御詠二首古
自筆鮮みして庭しへ世六い年とうとひとる
石上孫若宗長れ京塔ま被懐しく吉水梅ま
一年國れ九り四孫せうとく寺月天桂と号ま
山あり武僧周桂宗牧の吉ま沙ゆのうかても
一歌はあ〜面白〜為徳と帰り長公相州ま
唐を張〜氣〜氣をし〜今うはく〜すは井
ある二時れ管の圓ゐ〜はれ伊ひて色〜小府

中に八十三日先富士河間の社頭詣已後長善寺
一元雲出号御住持れ至宗の時りうる友敬宗法ま
ゆ〜と石ま〜徳と〜三条西殿千時大納言殿様
都れ寺称右院殿ゐ年れひ〜今ま〜ゆ
ろ千年ゆ〜と〜せゆ〜退出れ折帯被授ける
大紀ゐ是やなて〜富士れ雪
十四日〜一杉れ無行夜〜て旅庵〜帰り
仁村宗紀〜〜都ゆ〜れ降草古人ゆ寺参
と〜て〜ゆ〜れる東路〜上〜ゆ〜ゆ〜
故郷れ九〜て十八日三穂れ出ゆ〜れ

て移り眼神広屋の残り漏を京元数多い
きれてふふ池に天人の姿うつれる雲の陰ふ儀信
ひと村松ふ人所くしみ京れいつる馬あり
神れ数ふ山ふ墨中をの放きある院内光
當のふ寺東谷和尚伝ふきやて居ふ旅
時ふ所味ふきたるに法人寺月航和
尚ふ山越急ふとのき、負師
降めるを井掃ヲ神ふ浦をふ所ふ
海士人の墨田河京庵ふふ大宮ふ入小京文
て花ふ所ふ豆ふ釜和尚ふつふ持ふ漢和

一打ふて行ぬ故暁れふ起急儀のふ行ふ
普光院度ふ出屋石ふつふ沢負時ふ
富士ふ南ふ朝日も伊豆三島ふ北雲の見る山
浮瀉京ふ山方田ふの浦をふらきて泳ふ
復伝ひて去ぬふれ濱と海士人のふふ実
わふふふ出ふれふふふふふふふふふ
ぬ日ふふて門外ふふふふふふ雅呼をふふふふ
ふふて干潟ふ黒河ふ井奥殘ふふふふふ
雲ふふ波ふふふふふふふふふふふふ
ふふふに別ふて腐中ふ美ふふふふふ井日ふ

大守御礼申候一日発三条西院山張行
御ゝ道ゝ之絶ゝ之繁野ゝ之郷
廿三日三条院ゝ大ゝ之渡御ゝ之儀ゝ餐白ゝ之ゝ
川ゝ之ゝ有ゝ之ゝ船ゝ乗ゝ之ゝ忘ゝ之ゝ不ゝ絶ゝ廿日名
号百韻三条院ゝ御ゝ興ゝ大守御席 晩日ゝ沈ゝ
下野寺ゝ畠ゝ大ゝ守御席
絶ゝ之ゝ根ゝ年ゝ経ゝ之ゝ石ゝ井
六月ゝ一ゝ元ゝ雲ゝ御ゝ興ゝ
風ゝ解ゝ蓮ゝ花ゝ車ゝ郷
七日富士御同社司新宮ゝ参ゝ

実ゝ月ゝ陰ゝ
八日清見寺ゝ佳詩一章ゝ度ゝ
三穂ゝ雲ゝ仰ゝ趣ゝ奥津ゝ道牧雲ゝ
ゝ人ゝ清ゝ人ゝ知ゝ人ゝ宗長ゝ
ゝ書ゝ今ゝ懐ゝ墨
漆ゝ油ゝ香ゝ物ゝ
ゝ餐白 和当所堂
月ゝ涼ゝ儀ゝ
ゝ入ゝ日ゝ午ゝ時ゝ
船ゝ数ゝ海ゝ人ゝ

の磯の松もやつれひとしおなり都にて月
別をかこつ西行法師富士の雪所類なく詠ぜ
られ駿河の中にて日すがらひとり牧
雲寺城の下ゆく十日興行
蔓草はいづくにか猿橋のうち
山深きうつるかの鯛釣しく後も鶴の目
宗長牧雲は古同じ枕あるは所かと朝の文は
筆は便りは注尺の巻物をもつて媒もなきに
宗祇ゆつて世捨人なれば物語長公の席に
陪する。あくる廿一日興津河原はくぬき原あり

て作田ゆくゆく函谷関も見るはるゆく
を賛えて逝き風しく海山鶴しく清き人京
へ出る所紙所ひ和筆有ありしかるに前日にて
しかし筆句
夕立や走りくる雲は富士の嵐
和尚は服
投軒掃暑埃
一杯のうつ江川にて迎風は名酒今日はいかに府中
ゆくも風しきりなる味て主あるく旅の衣り紙
うゆくきえくをきくをきくをきくをきくを星ケ

かし剳りの奉る朧朧あとは萬葉集よりうく影をは
あまらる筆よりおさん都の孝甫とて宗長四郎
より住給ひ遺言十二月より興しの事なきしは府
内より入給
詠めよくも風ゆうえしに庭の跡し
上下おちつけ合せぬへる席と見えなり十三日には
西殿へおはしまして桐氏は大守より嘉肴江川魚
たりとて此宗和として殿の家を代ならる事様に泊まる旅
まで彼為行大黒天子宣は當は寝ならんや須會席なか
らぬ日に狂催して心をせん譲の舎りまとあるも

何りぬ逍遙院殿は故嫡孫にして此作意池は彼
をとく海せられひ稱名院殿より和漢有職は家をと
はりせらるゝ物かしなとしもとは中なるひ
し八年は逍しせのよ剰源氏は理を此事を
又世に類ひなしとかくあまれたとは名しけりとりたる
また鳥国に不審あ聞しはやまと詠なるいを
てよりもゆくへる所をも知りは心にして稽古の二字
はあらぬ此学すは能る家をしもるとやもをもしひ何
人標する家の宗のかくの名をは人なきにしかも
何しに命に稱名院殿は今集時深たる文字

をゆるせり、ひさしく後、やがて薨せるひしかば、供養
とゝ惠雲院殿（近衛殿大閤殿）うつりいさゝかのゆゑ
自らに宗とゝ、ありしかども、やがてうつり、富士
の嶽かたもしれず、不老の名も高く、三千歳をかぞ
きゝ、ふるのゝ、ふいうこゝろせんえのゆをたゝえ、
雪のうちのうたゝねもまれにさゝめ、
今都にて、後かいとたゝんも、思ひ絶る常花れ
ばかりにて、なるもあり、なるもあり、也十七
日神尾以ゝて、藤宮の隠居、家れ酒ゝ
酒よりて、中位のうたゝ泉ゝ帰

十八日、ゝは法印般ゝ、奥ゝ
源ゝ、ゝ代ゝ、玉の庭
伊満産以後二十首ゝ、屏風ゝ、法印冷
泉殿（午時中納言高倉卿）法印宗ゝ、勅ゝ、
ゝ十九日和漢法印、奥ゝ、廿日、
ゝ、長宮ゝ、帰ゝ、四屏風
金ゝ、在府事、仕奉ゝ、前尾ゝ、廿一日、
ゝ中ゝ、瀬石尾州ゝ、後伺ゝ、藤宮ゝ、
為入ゝ、秋ゝ、在府ゝ、御風ゝ、帷子
れゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

武尾山八大菩提の庵室ひしめき連なり
て二色に行きかよひ山の麓に
ある大原和尚魂もとゝ
しへ別当屋敷へ出る時分捨木枯の森へ以山同
を伐て行の川と流して下流流れて建穂
蔵坊へ行る時分して一町程流れ人ふし
ぶしある間もなくきと流れわたるとハ
弥一驚き給

貴北日の夢に風の風もう姉
夜ふかく帰りぬる時はるばる

時分なれども所如様の様子宗祇香炉宗長
松本孟翁三日法會席半ば御ふつゝ中もあ
ひ千鳥ゝ香炉鉢物洋尺紙忘して九月
ゝ蕎麦祥英西後日ゝ法ゝ恩ゝ
きの一所ゝ共只後校ゝ所以山丈
人物ゝ運命寺中ゝ明の龍
宿ゝん掛川ゝ寺ゝ明ゝ
ゝ種ゝ間を頭陀寺ゝ
十年ゝ永ゝ在洛の貴ゝ
頭陀寺ゝ在府ゝ

都筑宗嘉
舎弟千代丸

ゝ八昨今天龍

暦〻馬迎をくり数を揃るとて名ふ打たてゝ
都はるゝ〻ゝ行水をくり初く数をの事
むへ物やゝ為雲と老人へ宗長年八十として
十四歳より二十二年に宗長はゆゝゝ名ふ打たて
国向のしるゝ一打として
又ゝゝん吉松も為萩の雲
四夏をくり此一組迎年中意はむ宗長に帰る家
行たるゝ也廿七日いるゝ細江へ入るゝくるゝ
くいをゝひ行る数一本坂部へ通ゝ泊るゝて
氣賀西光寺に宿る暁ゝくる

秋をゝ窓に紅葉ゝ八木はゝ西に光ゝ月明の
廿八日ゝ山村修理亮ゝゝくゝゝて一會
夏ゝゝいるゝ細江や秋ゝ夕
ゝゝ為雲ゝ院も三河も小伊那作
ゝ行雲ゝゝ
院ゝ暁ゝ修理にゝゝる
遠江ゝ渡ゝる舟に四濱名橋ゝ浪
三河堀川をゝ名橋ゝ
ゝゝゝ名所を眺
向ゝて拝ゝ願寺に日ゝ一打として

風ハ秋西にむかふ故 袖も涼し
七夕の手向我家無蓋かゝしとく
参しゝや星に手向もうり 哀
[illegible]肉みして 野州塩原とゑかせ[illegible]
湊より潮来に渡せり 川より鹿島奥がとはつゝ
とらふ牛もてなゝせり故 八日に緒川清水左衛門亮
一命し
昨日何ひし星 湊に泊 舟
翌日は長坂[illegible]八橋のこす東へ急く時
登りやと納せしとて一折アり

花[illegible]萩に水もし 御来らす
十日は[illegible]緒川は御縁参宮
して帰るまては清水[illegible]助一無事白波[illegible]
定宿長坂[illegible]一帰して[illegible]
躍入のひ 十一日 仙庵ゆく 與行
萩れたる 山下道や濱付ゝひ
[illegible]青余[illegible]て 十二日一番[illegible]奥翁と[illegible]
ひし数く用ゐて濱辺の月見イ 孟[illegible]
れ手回をいふ[illegible]せく緒川より来多く
舟十二艘に灯[illegible]とも風流とうつるの海

上杉道真都へ入国ハ十六日暁の
堵に到着して意得の所へ細あるべ
きの事
堂さ[illegible]
宿[illegible]
又二里半南北[illegible]三熊野[illegible]
国[illegible]大源稙宿寺納涼せ[illegible]
衆僧の口所望して
三熊野の浦風涼しき秋の夜
七日の八幡并水野[illegible]と興行

流れを来る一樹も来ハ千船の郷
十八日祈願助千帝[illegible]
[illegible]
十九日[illegible]
を加祈願忠[illegible]
[illegible]を川口[illegible]
[illegible]
大野[illegible]
名[illegible]
柳橋[illegible]

浦風はやうふきて岩に当る音
廿四日の朝出船し四つ時
移り泊中路浦物を集もとく
世俗人の志あり貴ゆかハ閑窓老人も仮寝
宗牧度々ふねもる後寄をとりもし上句を
百もとし湯風呂其外何ふらんハ欲れども
なりて廿六日おの陽振野辺
鳴しをなひく夢間の朝戸うゑ
遠京唐信ふたりとなる廿七日小倉道場
来相興り

前日入やう夕沙風れ朝涼
満庭雪くゝみ舟寄に戸を添
廿八日は閑窓ゝに西ふしとの所とハ
馬ゝ所ゝ圓浄坊連元ゝ
茶の湯ゝ汀ゝ面ゝ反て船
ゝ廿四ゝ余ゝ木田堆ゝ瀬庭
若を浦て海もしに大野を所蒸雲隣雲院
も携ゝて遠千深ゝ
ゝ熟四ゝ今京ゝ加賀合銀
駿河へ引ゝ京延引て会て度ゝ

の名を題

雲うけ八分しに成おもく津の山

二月十七日宗長已来宿をせしに滝坊中く

宿りうしなひ侍れ本れ各所の邨

先師の伝聞ふ白雄園を庭しかれ人とうしに

日うけ安房国書助の新地の構て酒肴

松陰ちのくまて出入汐干やき所多しの

津海れ入江や谷の秋志声

出日にそうより亭主れ婚孫ふ小かしてのや

交丈敬人吉田年中事能おいて海

ふ二日うけ庭を法坊ふして伊勢海の蔵

門ふ出うて海をうすとうて公ふ河舟を

てく人家とうる中を地

瑚舟れ入河のくす不用う邨

七日ふ法花堂ふ中遠寺にして落れ

うう河ふ出やうう人る宮れ月

八月放生会と号して神事ふ社頭ふ神

以後神宮寺薬師堂ふ神楽行幸ふ先僧人

楽を奏ー社家人く内宴物を持く出仕ふ

堂内ふ社僧ふ法用後ふ大師護摩壇ふ

きりみかしの方に楊貴妃の墓ありとて五輪石塔
岩に傾て立あり九月十日に竹田出帰とて去年
昌叱かもとに宿せし人あり庭にし葛蔵とも
いふとひそる所なく
其葛をも入庭に松老女もあり
十日にはうるさくもなき所道家三条西殿其祖
父も宗長道託し入たる所帰とてハそのかしき
有なから執心深く次第戌書助殿亭にて
たりし人々と将とすなるもし辞の後舟に乗て
常書助庭に舞入足中乱かへしとて夜すらて宿

東へ下り御敷十一月十八日は仏名にて増も称讃と
比上山咲あらく本枝成昔八三井余僧鏡を澄るの事とえ
ともかくもい殿に納一念と
里遠き野にも称覚はきまてき哉
夜に入て法隆寺をたくさんとどとり讃歎橋に
あり此名ハ当宮北比𦘕塵宮にておは十日
とて三遠川祖母丈に縁あり十二日嘉祐とて日
破明院をとき社僧無しり日吉武島東本にて向火の時
燈をとり宗なる社也七社一也神秘明な
いとなみは一室にしらみ比光の哉

持宝院にて行者奥行
剃髪　暁月や墨の袖
嘉祐と称者ゆへ行脚する事二百余十二百余
阿波なの森門前に成ル勝寺奥行森の東方
魂香焼香又森下に社あり其下数十番の長
入ル瓶なり
野ゆかやなりて墨の袖
名月や清水西一見て行なる所坂井助蔵
田中に様子を聞なる色を彼為情ゆ行
移りて宗牧と尋入て長谷行人にて社頭へ

引して寄宿ハ橋のうへ月ゆかり
く酔中に行旬
月をうり都をうてなり今宗牧
宗牧ハ周防なる人ゆへ都ハ任長年ハ
来居て居なる所長瀬一向宗ハ堺尾州
大守ハ陣をもハ甚月寺以玉りて行ゆ時西之
ものなりて中今ハ馬をひく
しなりてなりに入て行来いるなり
ひ子鞋解をく仙庵川ゆ長覚寺と云
多那ハ人の多へ志文之又山後嶽ゆ聖林欲

来りて、安治川より淀川を遡り、海老江の辺
より酒を出して夜を明し、十八日大高城より
出船、伏見迄舟を掛ける庭にて、上り岸に
船の舟二艘なりて、嘉祐通気亭と書く
とぞ、いうきたりし、大高城の絵図、
詩をもてし所也、城は松風の里、橋は呼続の浦
なり、仙庵谷川より来る迄、
時はきれ濱辺や音に聚し舟
夜半の西を見るに長湯ひとつを故大
光殿しるし白日出るかと起て
旅枕夢ちたのむも秋の夜月のうち入る書風の里
明るを防州なる馬なり来る中に行兵
共日夜半より橋を渡りて一把に成て
水酒なりなる風橋夜泊とて宗宮
老人聟は石川三州重阿来相は橋まで送る也
曙は濃を由橋に着なり尾州の名所なるなり
いひたるなる所は中なる也春なるに
久ゆ紀山なるなる金なるなる廿二百辰刻なる
河也邪一家なるは烟なるのなる儀なる云は甲なるて

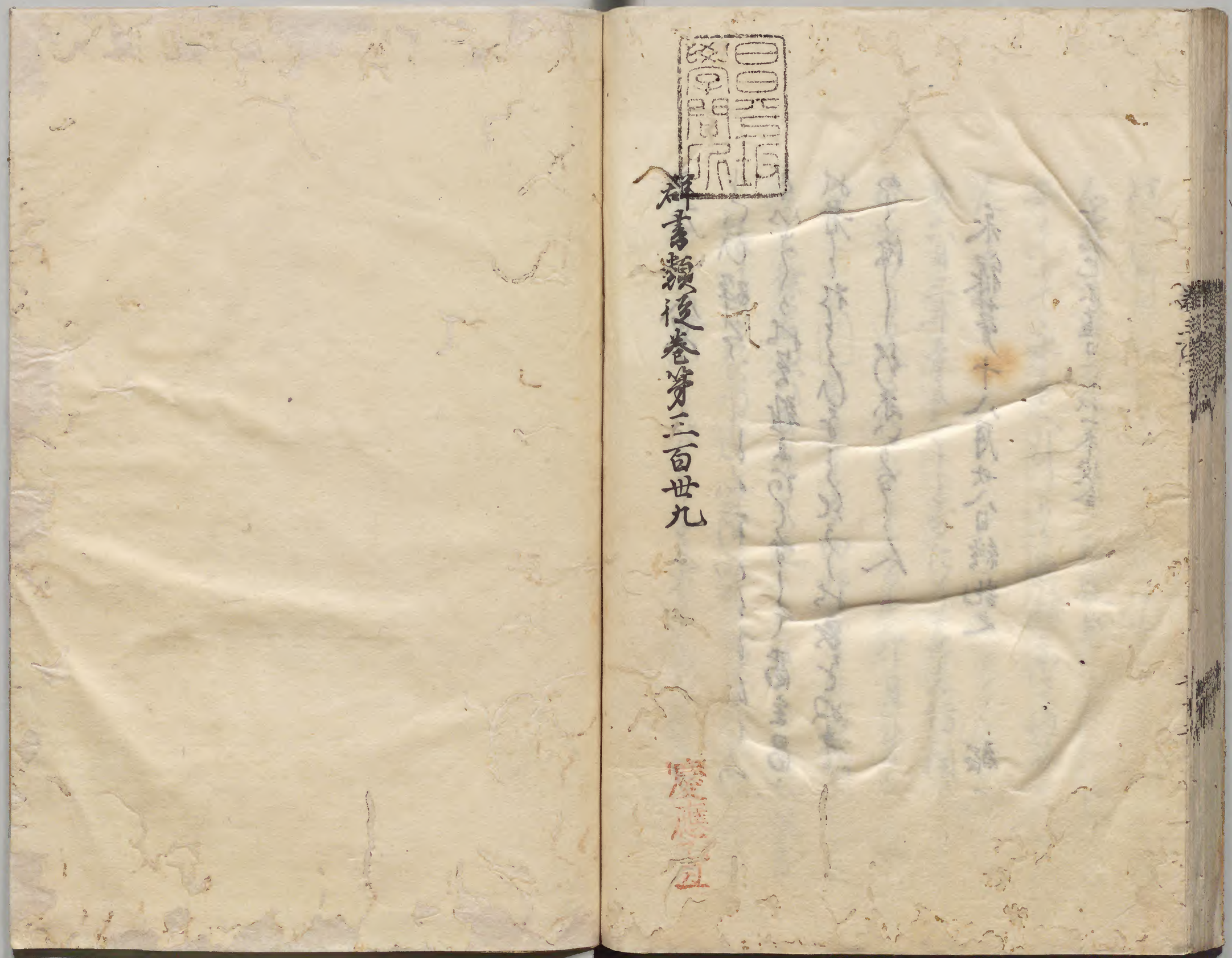
其夫野和作りなもいとこ[illegible]尾[illegible]連[illegible]朝
[illegible]遠[illegible]ちる祐運馳走[illegible]遠[illegible]
安[illegible]て永[illegible]人[illegible]ちる前越[illegible]る道筋善[illegible]治
[illegible]為也
廿六日三井寺[illegible]たく花光坊相伴[illegible]
春[illegible]るにかをし[illegible]也卯月廿[illegible]遠[illegible]
[illegible]い皮□前[illegible]四種[illegible]た髪剃[illegible]
[illegible]も徐君興[illegible]也
[illegible]人[illegible]也相伴[illegible]
不定世界[illegible]廿七日如意嵩越[illegible]卯

[illegible]人[illegible]なきよ[illegible]
[illegible]ひ酔[illegible]ぬ人前兩僕[illegible]
[illegible]れ[illegible]雑[illegible]て雷[illegible]昌此縁者
[illegible]者[illegible]ひ[illegible]
[illegible]ん

永禄第十八月廿八日終記之

右紹巴不盡見記以一本校合

紹巴



内閣文庫

群書類從卷第三百廿九

隆德堂

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan